

自己評価分析とその実例

——自己形成の社会心理学——

渡 辺 康 麿
(玉川大学)

1 自己評価分析の理論

(一) 自己評価分析の方法と目的

自己評価分析は、自己史に対して、次の三つの問いを問いかける。

- ① 自己の存在価値が、いかなる他者から、いかなる価値基準に基づいて、いかに評価されてきたか？
- ② 自己が、自己の存在価値を、いかなる価値基準に基づいて、いかに評価してきたか？
- ③ 自己が、いかなる他者の存在価値を、いかなる価値基準に基づいて、いかに評価してきたか？

①を他者評価、②を自己評価、③を対他評価と呼びたい。この問いは、相互に深い関連をもっている。

しかし、この三つの問いの中で、決定的な問いは、②の自己評価である。他者評価は、自己評価の前提としての意味をもち、対他評価は、自己評価の帰結としての意味をもっているからである。したがって、自己評価分析がさしあたり、狙いとしていることは、自己が自己自身の存在価値をいかに評価してきたかという観点から、自己史を再構成することである。一言で言うならば、自己評価の歴史を叙述することである。ある人の自己評価こそが、

その人の他者に対する態度や行動を理解する鍵をなしているからだ。

自己評価分析が目ざしていることは、自己評価の根拠となっている価値基準を自覚せしめて、あらゆる既成の自己評価から解放して、現実に対して即事的な態度をとることができるようにすることである。

(二) 自己価値確認欲求

私たちは、人間の生存をさしあたり、欲求充足の過程であるにとらえることができる。

たしかに、私たち人間の欲求は、今日、多種多様に分化展開してきている。しかし、人間の欲求をつきつめるならば、大きく二つに分けることができる。すなわち、自己の生存を保持しようとする自然生理的欲求と自己の生存価値を確認しようとする社会心理的欲求である。

自然生理的欲求は、さらに、個体の生存保持への欲求（例えば、食欲）と種の生存保持への欲求（例えば、性欲）とに分けることができる。

社会心理的欲求は、さらに、他者評価への欲求と自己評価への欲求とに分けることができる。

他者評価への欲求とは、自己の生存価値が他者によって、肯定的に評価されることを求め、否定的に評価されることを避けようとする傾きであり、自己評価への欲求とは、自己の存在価値が、自己自身によって、肯定的に評価できることを求め、否定的に評価せざるをえなくなることを避けようとする傾きである。

(三) さまざまな自己評価の試み

自己評価分析にとっては、社会とは、他者の評価を意味する。この場合、他者は、特定の具体的他者（父親、母親、教師、友人、上司等々）から、不特定の抽象的他者（大衆、民族、階級、人類、神等々）にまで及ぶ。

他者は、私たちの存在価値を、特定の社会的価値基準に基づいて、特定の他者との比較において、肯定的あるいは否定的に（質的規定）、より高く、あ

るいは、より低く（量的規定）評価する。言いかえるならば、私たちの存在価値は、他者から、肯定的により高く評価されたり、否定的により低く評価されたりする。私たちは、この他者評価の不安定さからのがれるために、他者の評価に対して、さまざまな対応をする。私たちの対応の仕方が、私たちの社会的性格（他者に対する態度）を形成する。

（1）他者評価に基づく自己評価の試み（依存型）

私たちが、私たちにとって重要な他者（両親、教師など）から、自己の価値が肯定的に評価されるようにしようとする試みを他者評価への積極的順応と呼びたい。それに対して、私たちが自己の価値が他者から否定的に評価されないようにしようとする試みを消極的順応と呼びたい。

私たちが、他者から自己の価値を否定的に評価される時、私たちは自己価値危機におちいる。その時、私たちは、その他者評価から逃避しようとするか、あるいは、他者評価に対して、反抗しようとする。前者は、非社会的な性格を形成し、後者は、反社会的な性格を形成する。しかし、いずれも、自己価値を防衛しようとする試みであると言えることができる。

（2）他者との比較による自己評価の試み（競争型）

私たちは、重要な他者から、特定の価値基準に基づいて、特定他者との比較において、肯定的、あるいは、否定的に評価される。その他者評価の経験から、私たちは、重要な他者から取り入れた価値基準に基づいて、特定の他者（具体的な他者であれ、抽象的な他者であれ）と比べて、自己の価値を自ら、肯定的に評価したり、否定的に評価したりするようになる。

この他者との比較による自己評価も、積極的形態と消極的形態に分けることができる。

特定の社会的価値基準に基づいて 特定の他者との比較によって、自己を肯定的により高く評価できるようにしようとする試みを積極的形態と呼び、それに対して、自己を否定的により低く評価しなくてすむようにしようとする試みを、消極的形態と呼びたい。

（3）自己との比較による自己評価の試み（自立型）

私たちは、自己がたてた特定の価値基準に基づいて、過去の自己、あるいは、未来の自己と比べて、自己の価値を肯定的、あるいは、否定的に評価しようと試みる。もし、私たちが、他者との比較による自己評価の試みを、自己を空間的に位置づけ評価する試みであると言うことができるのであれば、他者との比較によらない自己評価は、自己を時間的に位置づけ評価する試みであると言うことができる。

この場合にも、積極的形態と消極的形態とに分けることができる。

(4) 自己評価の相対性

いずれの自己評価も、二重の意味で相対的である。

まず第1に、私たちは、何らかの特定の価値基準に依って、自己の価値を肯定的に評価したり、あるいは、否定的に評価したりするという意味で、相対的である。

第2は、私たちは、特定の他者、あるいは特定の自己との比較に依って、より高く評価したり、より低く評価したりするという意味で、相対的である。

この評価基準および比較対象の相対性は、私たちの自己評価を不安定ならしめるものとして働いている。

2 自己評価分析の実例

いままで、自己評価分析の方法とその理論について述べてきた。

これから、H君という一人の高校生が、いかに他者から評価され、いかに自己自身を評価するようになり、さらに、いかに他者を評価するようになっていったかを、H君自身の具体的な生活場面を通して物語ってゆきたい。

(一) 性的能力に基づく自己評価

H君は幼稚園に通っていたころ、毎日のように、近所の同じ年齢の子たちとおママごと遊びをした。一人は、男の子で、一人は女の子だった。ところ

が、その女の子は、おママごとがはじまるとすぐに、「私、外へ遊びに行ってくるわ」と言っておママごと遊びからぬけ出して、その男の子のもっている本を読み始めるのだった。すると、男の子のT君は、「ぼくは、お父さんになるから、きみは、お母さんになれ」と言った。H君はイヤだと言うことができなかった。それで、いつもお母さん役を引き受けねばならなかった。

小学校になってからも、H君はT君といっしょに、よく遊んだ。ある時、T君がH君に「キスごっこをしよう」と言い出した。キスをする時、H君は目をとじて、T君がくちびるをよせてくるのを、ただ待っていた。キスをした後でT君が「Hちゃん、女の子みたい」と言った。その時、H君は自分でも自分のことが、女の子みたいに思えて、恥ずかしかった。

やはり、小学生のころだった。そのころ、シスター・ボーイという言葉がはやっていた。H君はみんなから、シスター・ボーイと言われた。そう言われるのがとてもいやだったが、反抗することができなかった。

中学に入って間もないころだった。昼休みの時間なので、ほかの級友は、みな、校庭に遊びにいていた。ただ三人の生徒、H君と乱暴な男の子と一人の女の子とが、教室に残っていた。その男の子は、H君に向かって、「お前のキン玉は、でっばっていないから、お前は、男じゃない」と言った。その上、「お前のは、こうなっている」と黒板に図まで書いた。女の子は、黙って、それを見ていた。H君はからだは石のように固くなって立っていた。

H君は外で球技をしなかったので、教室で女の子たちと話をすることが多かった。ある時、一人の活発な女の子が、H君が長い髪の毛をヘヤーピンでとめているのに気づいて、「Hさん、女みたい！いつも女の子とばかりいるのね」と言った。それから後、H君は、自分の声のカン高いことや、肩がなで肩であることに、それが、自分が女性的であることの証拠のように思われて不安になった。

(二) 運動能力に基づく自己評価

H君は幼稚園の運動会のかげっこの時には、いつも、ビリだった。一番うしろを走ってゆく時、見物の人たちは、拍手をしてくれた。しかし、H君はうれしくなかった。かわいそうだから、拍手していると思われたからである。みんなに見られていることが恥ずかしかった。

小学校にあがって間もなく、H君は運動会のための行進の練習をした。しかし、彼だけは、みんなのように手と足を交互に動かすことができなかった。どうしても手と足が、いっしょになって、前へ出てしまうのだった。級友たちは、家へ帰ってゆくのに、彼一人だけ、放課後も残されて行進の練習をさせられた。

小学校一年の夏から、体操の授業として、水泳の練習が始まった。先生は、第一年目には児童たちに水に慣れさせ、第二年目からは、水に潜らせた。H君はそれまでは、どうやら、授業についてゆくことができた。しかし、三年目に、先生は、水に飛び込んで泳ぐことを命じた。H君は背がたたないところで泳ぐことは、できなかった。彼は、病気であるという口実をつくって、水泳の時間を休むようになった。

体操の授業では、彼は、鉄棒も、マット体操も、みんなと同じようにはできなかった。そのなかでも、跳び箱はとくに苦手だった。走って行って、思いきりよく踏み切り、足を開いて跳び越すのができず、跳び箱にぶつかってしまったり、跳び箱の上ののっかったりした。跳ぶことのできる級友たちは、できないH君のかっこうを見て笑い、ヤジをとばした。

中学に入ると、体操の時間は、体操専門の先生が受け持つようになった。さまざまな球技が新しく導入された。

バスケット・ボールの試合では、彼がパスすると、すぐに敵側にカットされ得点にされてしまった。それで、彼には、味方から、パスがまわってこなくなかった。といっても、じっとしていると先生から叱られるので、H君はただ意味もなく、ボールの動きにあわせて走り回るかっこうをした。

バレー・ボールの試合では、H君は前衛でスパイクすることはできないので、いつも、後衛だった。後衛でも、彼は、強い球がくると、うまくレシーブすることができなかった。また、H君がサーブするときも、彼のサーブするボールはネットにひっかかって相手のコートにとどかなかった。

サッカーの試合では、少し走ると、H君は息がきれてしまうので、ボールに追いつくことができなかった。それで、いつも、ゴールの近くにぼんやりと立っていた。

球技のほかにも、走り幅跳び、走り高跳び、棒高跳び、ハードルなどが、新しく入ってきた。なかでも、棒高跳びとハードルは苦手だった。H君は棒高跳びをするたびに、バーを落としたし、着地のときには、砂場によく顔を突っ込んでしまった。ハードル競争の時には、彼は、ハードルの半分以上を倒した。倒さずに走ろうとすると、一つずつ、立ちどまってから、ゆっくりと跳ばねばならなかった。

高校に入ると、球技の技術は、いっそう、洗練されていった。H君にとって、それについてゆくことははやできないことだった。それに加えて、剣道や柔道や空手のような武道が、新しく入ってきた。どの種目の試合でも、H君は、負かされるばかりで、勝つことはなかった。

(三) 身体器官に基づく自己評価

小学校に入った時に、H君は、絵を習うことになった。初めの日、H君はその絵の先生のところへ友だち二人に連れていってもらった。彼は、めったに、他人の家へ行ったことがなかったので――。

すぐに教室として使われている部屋に通され、三人は並んですわらされた。部屋があまりに静かだったので、身動きするのさえはばかられた。しばらく経つと、彼はトイレに行きたくなった。しかし、先生にトイレに行きたいと言い出すきっかけが見つからなかった。変に思われぬように、言い出しの文句をあれこれと考え、心の中で何度か言ってみたが、最後にはどれも、変に思えてきた。額には、冷や汗がふき出してきた。先生の話が一刻も

早く終わるようにと念じ続けた。帰りに、H君は、ビニール袋の中に、自分の濡れたパンツを入れてもらって家へ帰った。

その夜、彼は、はじめて布団におしっこをもらした。それから、それが毎晩続いた。ふとんが冷たくなってから自分がおねしょをしたことに気づいた。その度に母親をおこして、下着をとりかえてもらった。

やがて、ふとんにはビニールが敷かれ、彼が寝つくまで母親が添寝するようになった。母親は、ある時、「お前は、どこか、異常じゃないのか」と言った。そして、H君をいろいろな治療師のところへ連れていった。しかし、どれもこれといった効果はあがらなかった。

H君は小学校二年にもなって、おしっこをもらすのは、自分だけではないだろうかと思った。

学校では、夜尿のことは忘れて過ごしていた。しかし、体操の時間には、服を着がえねばならなかった。もし、おねしょのことがみんなに知られたらと思うと怖くてたまらなかった。昨夜のおねしょのパンツは脱ぎかえ、新しいパンツをはいていたが、もし万が一、臭いがしたらと心配だった。彼は、となりの友だちと距離を保ちながら、体操着に着替えた。しかし、その後もなお、友だちが気づかなかったかどうかを確かめるため、そっと、まわりを見回した。

母親が、彼をある指圧師のところへ連れていった時のことだった。その指圧師は、彼の裸の背中を見て、「背骨が少し曲っているようだね」と言った。そう言われてから、H君は自分の足がガニ股であることにも、気がついた。

中学生になるとH君の夜尿はやんだ。しかし、彼はそのかわり、自分の背骨が曲っているということや、足がガニ股であるということが、とても、気になりはじめた。写真にとられる時は、H君は背骨が曲っているのを隠すために、首をいくらか反対方向に傾けるようにしたり、ガニ股をかくすために、足を内側にねじるようにしたりした。それで、H君は、写真にはいつもごくごちないかっこうで写っている。

高校二年の三学期も終わろうというところだった。H君たちは、国語の自習

時間に芥川龍之介の『鼻』という短編小説を読んでいた。その小説の内容は、主人公である高僧が、人なみはずれた大きな鼻をもっていたために、人々からひそかに笑われるという話だった。

その時、彼の真向かいにいた女子の同級生二人が、彼の顔をみて、くすつと、笑ったように思われた。とっさに、H君は、彼女たちが自分の背骨が曲っているという秘密を知って、笑ったのだと思った。試験が終わり春休みになるとともに、H君は女の子に秘密を知られてしまったという不安におそわれるようになった。

街路を歩いていくと、すれちがった人たちが彼の方をふりかえり、小声で「あの人の背骨は曲っている」とささやきあった。

父親と一緒に銭湯に行くと、銭湯の天井に反響する人の声が、「お前の背骨は曲っている」とH君に言っているようだった。

テレビをつけると、アナウンサーが、コマーシャルのようにくりかえし「お前の背骨は曲っている」とH君の耳にささやいた。

夜になって床についていると、隣のバーのバーテンダーが、お客たちに、「実は、となりの子の背骨は曲っているんですよ」とささやいている声が、壁ごしにきこえてきた。

H君は外へ出られなくなり、一日中、雨戸を締めきった部屋に、閉じ込められていた。両親は驚いて、彼にその訳を尋ねた。H君はみんなが「お前の背骨は曲っている」と言っていることを話した。両親は、そんなことは、あるはずがないと言って、相手にしなかった。「誰も、お前の背骨が曲っていることを気にするほど、暇ではないよ」と母親は言った。H君はどうしたらよいかわからなくなって、「病院へ連れて行ってくれ」と言った。「そうすれば、本当かどうか分かるんだから——」。

母親に抱きかかえられるようにして、タクシーで病院へ行った。そこで、H君は、医者に、みんなが、いつも、お前の背骨は曲っていると言っていると訴えた。医者は両親に「彼の言っていることは、ほんとうです」と言い、彼には、「すぐ入院しなければいけない」と言った。

(四) 学習能力に基づく自己評価

病院では、もはやH君の背骨が曲っていることについてささやくものはいなかった。

二か月後に、H君は退院した。学校にもどってみると、授業は、全くわからなくなっていた。友たちはこれまでになく、一生懸命に勉強をしていた。彼は、遅れをとりもどさなくてはと思った。しかし、級友たちとの距離は、ますますひろがっていった。

ある時、いくつかの漢字が思い出せないことがあった。そのような小さな事も、もはや彼が高校生活が続けることができない者であることを暗示しているように思われた。

その上、H君は自分が病院に入っていたことを、友だちから知られることを恐れていた。誰にも、自分の問題を打ちあけることが、できなかった。H君は次第に夜に眠ることができなくなっていた。そして、ついに、自分から望んで、再び、病院に入ることになった。

(五) 自立能力に基づく自己評価

病院で、H君はふたたび、眠ることができるようになった。しかし、いつまでも、病院にとどまることはできない。といて、ふたたび、学校へもどって、勉強を続ける自信はなかった。さりとて、どこかで働くという自信もなかった。ともかく、学校には残りたかった。そこで、同じ高校にもうけられていた夜間部に通いたいと、母親に言った。

母親は、昼間の高校の担任の女の先生を訪ね、転部の手続きについて尋ねた。その担任の女教師は、「転入の手続きぐらいは、息子さんにやらせるべきです。もう、お宅の息子さんは、子どもではないんですから——」と言った。

母親は、帰ってくると、彼にそのことを伝えた。H君は自分がまだ子どもっぽいのではないかと不安に思った。

H君は夜間高校の最終学年に入った。このころから、彼はちょっとしたことがきっかけで、母親と言い争うようになった。つっけんどんな言い方でしか、母親にものを言うことができなかった。

夜の間、学校に通っていたので、昼間は、家にいることが多かった。母親は、彼が何もしていないのを見ると、「ブラブラしていないで、勉強しなさい」と言った。

そのうち、H君は母親との口論を、日記に書きつけるようになった。家を早めに出て、駅前の広場のベンチに座って、書きつけた。そして、それを、担任の教師と好きな女教師にみせるようになった。そうすることで、安心した気持ちになった。

しかし、母親とH君との関係はあいかわらず、重苦しいものであった。次第に、H君は勉強に手がつかなくなっていっていった。そのかわりにたくさんのレコードを買いこんでは、長い時間聴くようになった。母親は彼に対して、ますます厳しい態度をとるようになった。彼女は、彼が真面目に勉強することを期待していた。

病院へは、週に一度ずつ通っていた。H君はある時、母親との争いのことを医師に話した。すると、医師は、「それは、当然のことだ。君も強くなったね」と答えた。しかし、その医師の答えは、彼を不安にした。まだ、母親に頼っていた気持ちが残っていたからである。「自分は、まだ自立していないのだ」と、H君は思った。

ある時、H君は授業中に、突然、泣き出したことがあった。母親との争いが思い出されて、自分でもどうしていいか分からなくなっていたからだ。先生はすぐに気がついて、他の生徒に医務室に連れてゆかせた。級友は彼を医務室のベットにねかせた。彼は、だれか話のわかる人を呼んでくれるように頼んだ。担任の先生のかわりにまた習ったことの無い若い先生がきた。H君には、その先生が、既に、彼のことについて、聞いているように思えた。「君はいつまでも、甘えてはいけなさい。自分の足で立ちなさい。禅寺に行つて、修業しなければ、君の病気は治らない」とその先生は、言った。その思

いがけない叱責は、彼を驚かせた。その後、H君は怖くなって、しばらく学校を休んだ。

期末試験が近づいてきたにもかかわらず、H君は落ちついて、勉強ができなくなっていった。最後の授業時間のとき、一人の級友がノートを写したいから、貸してくれと言った。

その彼はH君にノートを返す時、自信にみちた調子で、「ぼくはきみに負けないよ」と言った。その時、H君は自分が昼間の高校から来ているにもかかわらず、この夜間の高校生に、確実に追いこされてしまうだろうと思った。彼は試験をうけることをやめてしまった。

夏休みに入って、担任の教師が、母親を訪ねてきた。H君はちょうど、家を留守にしていた。担任の先生は、彼が試験を受けなかったと告げた。また、H君が彼のところに例の日記を持ってくるのは、負担になるからやめさせてほしいと言った。さらに、夏休みの終わりまでに、勉強を続ける気持ちがあるのかどうかをよく考えて、答えを出してほしいと言った。

しかし、H君には決心がつかなかった。一方では学校には、残っていたかったが、他方では、ちゃんと勉強を続けていけるかどうか不安だった。夏休みの最後の日に、H君は両親と一緒に担任の先生のところに行った。しかし、彼は、最後まで、勉強を続けるとも、辞めて働くとも答えられなかった。ついに、先生が「じゃあ、また身体がよくなったら、いらっしゃい」と言った。

(六) 精神的機能に基づく自己評価と労働能力に 基づく自己評価

H君が夜間高校を辞めた時、医師は彼に言った。「すぐに、働きに出なくてははいけない。絶対にぶらぶらしてはいけない」と言った。両親は、「お医者さんの言った通りにしないと、また、病院に入らなければならなくなるんだからね」と言った。

母親は、早速、新聞のなかからアルバイト先を見つけてきた。そこは、レ

コードのジャケットをつくる会社だった。H君にとっては、以前からレコードを聴くことが、ただ一つの安らぎだった。その会社に入ると、レコードが安く買えると聞いて、働く気になった。

しかし、社長の家での面接が、H君には心配だった。とりわけ、履歴書に病院に入っていたことを書くべきかどうか迷った。書けば自分が精神的病氣にかかっていたことが、わかってしまうし、書かなければ、嘘をつくことになるので、気がとがめた。結局、母親から言われて「病気のため休学」と書いた。面接の時には、母親が上手に、社長に説明した。

会社では、H君は、一番若かったので、みんなに可愛がられた。しかし、H君の仕事は人よりも遅かった。仕事仲間から、「長くやっているうちには早くやれるようになるよ」と励まされたが、仕事になれてきてもかわらなかった。「自分は仕事が遅い」という劣等意識がいつもあった。

働き始めて、数か月たつうちにH君は仕事をするのがいやになってきた。何かしら、学びたいという思いが起こってきた。そう思うと、余計に、働くのが嫌になった。しかし、自分では何がやりたいのかわからなかった。

そこで、「全教科はできないから、何か一つのことをしっかり学びたい」と母に頼んだ。母は、「それじゃあ、おまえは、字がきれいだから、レタリングをやったらいい」と言った。

新しい学校では、デザインとレタリングの基礎を勉強した。毎日宿題が出された。夜に宿題をやっていると、隣りの家の庭にいる白いスピッツが必ず吠えた。H君は、何度も外に出ていっては、犬をにらみつけたり、「うるさい、黙れ」とどなったりした。彼は気がちって宿題が思うようにできなかった。

前半の三か月は、何とかついていけたが、後半の三か月になると宿題がたまってきたうえに、印刷概論の計算など、全くわからなくなってしまった。もうすぐ卒業というところに、彼は学校に行かなくなった。

その後、しばらくの間、H君はふたたび家にいた。母親は、その彼に「どうして、働かないのか」とか「親が死んだらどうするつもりなのか」とか

「女に食わせてもらうつもりなのか」とか言った。また、彼が散歩に出ようとすると、「外をぶらつかないようにしてちょうだい。お前がぶらぶらしているのを見られたら、近所の人に恥ずかしいじゃないか」と言った。

H君はふたたび、アルバイトに出かけた。ブリキ缶をハサミで切って、折りたたむという仕事だった。慣れている人は、30分位でできあがるのだが、H君は一つやるのに二、三時間かかった。その上、できあがりは、汚ないし、手を切ってしまうことも、しばしばだった。時には、ブリキ缶がいっぱんに、五、六個まとまって来た。そうになると、彼は、どうしていいか分からなくなってしまった。

そのころから、H君は不安につき動かされて、上を見るようになった。そして、胸のなかで呟いた。「どうして、自分だけが、こんなに苦しまなくてはならないんだろう」と。

苦しい毎日が続いた。地下鉄の駅で、電車を待っていた時のことだった。迫ってくる電車へ向かって、とっさに、身を投げだしたいと思った。しかし、何も見えなかったし、足はすくんで動かなかった。誰かが後から押してくれないかと思った。

(七) 総括

H君がいままで、いかに他者から評価され、いかに自分自身を評価せざるをえなかったかを具体的なエピソードをとおして、たどってきた。

学校においては、H君は級友たちから性やスポーツや成績という価値基準に基づいて「女みたい」とあるとか、「スポーツができない」とか、「勉強ができない」とか否定的に評価されてきた。

職場においては、仕事仲間から仕事という価値基準に基づいて、「仕事が遅い」とか「仕事が下手だ」とか否定的に評価されてきた。

家庭においては、母親や妹から、倫理的価値基準に基づいて、「大人でない」とか「怠け者だ」とか否定的に評価されてきた。

その上、H君はいつも、自分が身体的、精神的に異常であるという理由

（価値観点）で人々（世の中）から全く否定的に評価されるのではないかという恐れをいだいていた。

H君は、自己価値を防衛するために、他者から否定的に評価されることを、ひたすら、避けようと試みてきたと言ってよいだろう。H君が、他者評価から逃れようと試みれば試みるほど、かえって、不安におちいり、不安になればなるほど、H君は、他者評価から、逃れようと試みているのである。

3 自己評価分析と生涯教育

生涯教育という言葉は、教育は学校教育だけで終わってはならないという主張をふくんでいる。一般には、現時点では生涯教育は、教育の場という観点からは、社会教育であり、教育の時という観点からは、成人教育であると解されている。

私は、この自己評価分析を、単純に成人のための道德教育であると考えている。今年の夏、私は、玉川大学の通信教育のスクーリングで、私の「道德教育の研究」の受講生である方々を、既に教師である方々や、教師を志望されている方々に、自分自身の自己評価史について、書いてもらった。そのさい、受講後の感想も一言書き加えてもらった。その感想をここで紹介したい。

「今回の先生の講義は、私の今まで受けて来た講義の中では、非常に珍しい型のものであり、私は興味をもって聞きました。この講義を通して初めて自己の内面の動きを文章にしましたが、このことは、私にとっても有意義なものであったと思います。しかし、自己の考え方の傾きや、自分がどのような価値基準で動いてきたかについて、上に書いたこと以外にもっと大きな、そして、心の底の方にある何かが自分にあったのではないかという気がしてなりません。この事を探求することが、今後、私に課せられた課題だと思います」

「『道徳教育の研究』という科目を選んだ時から、『一体どんな講義内容なのだろうか?』と大変不安でした。でも、今、この短いスクーリングの講義を聞き終わって、何か言葉で言い表せないほど充足感を感じています。それは、私が永らく持っていた問題点をより深く、より現実的に先生が講義して下さったためだと思います。これまで私は“人生を何か、はっきりとした目的を持って生きてみたい。生きがいを見つけたい。そのためには、どんな道を歩めばよいのか”とあたかもSさんみたいに、いたずらに焦って考え続けてきました。対人問題でも種々のトラブルがありましたが、何冊かの本とのめぐり合いによって、以前より多少、おだやかな心境で過ごせるようになりました。そんな折、先生の講義により、私はさらに“私の内面的な問題を解決できる方向に歩き出せた”という感じになっております。……」

「先生のお話は、すべて興味深く聞かせて頂きました。一個の人間として、あるいは、家族の一員、社会の一員として、教師の一員として、かたよった“ものさし”をもつことの恐しさのようなものを感じます。先生の人生豊かな御経験から、何となくとらえどころのない“道徳”というものも、身近な例をあげて、お話して下さったので、その根本が自分なりにつかめたような気がします。Sさんというひとりの女性の自己形成を追ってのお話も自己をかえりみるよい手がかりになりました」

「……今まで振り返ってみたことのなかった自己の生活態度をみつめられたことは、よかったのではないかと思います。それによって自己の内面を知り、他者への思いやりも深められるのではないかと思います。そのなかに、道徳というものの真の意味があるとするなら、まだまだ学びたいことがたくさんあったように思う。大学で習った道徳教育と異質のもので、たいへん、興味深かったです」

「最後に、先生の授業で気がついたことは、大学を卒業してから、自分は“仮りの生活”をしていたということであった。今、この瞬間が大切である。現在に価値をおくことを忘れていたのである。いつも未来の方ばかり見ていたようなところがあった。確かに目標も大切だが“今を生きる”ことを忘れてはならないと思った……」

「……自分を振り返ることが、いかに重要なことかが認識させられた。人生に新しい方向性が加わったような気がする。授業を聞いていて、俺は何んてバカな How to 人間なんだと落ち込むこともたびたびであった。このところ、教員になることが、最大の目標になってしまっていて、あまり考える時をもたなかったのも、最高によかった」

「これまで、私は何かができる、できないにより、価値がある、ないとしてきた。それは、周りからの枠づけだった。けれども、この講義では、そうではなく、ネガティブなものを受け入れるという内容をきき、目が開かれた思いである。実例をとおしたので、とてもわかりやすかった……」

「折にふれ、1か月に1回くらい日記を書くことはあっても、今回のスクーリングほど自分で自分をみつめる機会をもったことはありません。これから先も、自分を見つめられるだけの余裕を持って生きたいと思います」

「ある一人の女性の生き方について、とても興味深くおききました。また、このように自分の歴史を書くということは、はじめてのことですが、自分を見つめなおす意味で、とてもよかったと思います」

「……こんな状態の時、渡辺先生の講義をきき、最初のころと終わりのころとでは、ずい分とかわった。Sさんの話をききながら、自分のことと比較し、自分をみつめ、自分がいかにわがままであったかがよくわかった。……」

いままで、価値ある自分になることに焦っていた。また、お金持ちの人に対してのひがみをもつ自分の未熟さをやっと24にしてわかり、目がさめた。この発見に、気持ちが楽になり、何か胸がワクワクするような幸せの感じにひたっている。愛する人と結婚でき、しかも、好きな道をめざしていけることに何の不満があるのでしょうか。この道徳教育は、私にとって貴重な1ページになりました。本当にありがとうございました。しかし、まだまだ、周りのすべてを無条件に受け入れることは、難しく、そうなるためには、どうしたらよいのか、難しいことです。そうなれたら、しあわせなことだと思います」

「前の大学の時の道徳教育の研究とは、まるで違いました。前は、教科書一ぺんとうで形式にはまった授業でした。その点、先生の授業は、自己評価、他者評価について具体例を示して下さい、また、評価についての特訓のような感じで、大変興味がありました。また、自分自身を振り返ってみることができました」

「私は道徳教育というものは、何処となく難しいものだと講義を聞く前に感じていました。しかし、先生の講義で例題をあげて説明されるのを聞いているうちに、誰でも一般に経験していることなので、私から遠い位置にあった道徳教育が身近なものになりました」

「道徳教育の研究ということで、想像していた内容とは、食い違いがありましたが、私にとっては、大変魅力ある授業でした。はじめて自己を分析してみることを知り、自己を振り返る機会を与えられたことは、私にとって、非常に貴重な経験でした。……」

「道徳教育とは、人間形成の志向にある子どもたちを指導している教師の自己評価につきことを学びました。……道徳とはうんぬんと論理的に聞いても自分の身につかなければ、何もありません。……」

「短い間でしたが、私にとって心の底を考えさせられるような授業でした。今まで、知りたくない、逃げよう、考えたくないといった気持ちでしたが、自分がぎりぎりの所にいるように思います。まわれ右をして、自分という人間と話し合ってみるつもりです。どんなに時間がかかっても、解決しなければなりません」

「道徳教育とは……の講義だろうと予想していたし、期待(?)していた。ところが、全くその一言もないような、何かおもしろい話(物語的に聞こえる実話)が、くる日もくる日も続く、この授業は、いったい何の授業だろうと思ったものです。でも、講義の終わりの2日前の授業で『自己認識ということで、自分のいろいろな感じ方がどこからきているのかをつきとめてみる。そして、自分自身の問題を発見し、自分で解決していくことができるならば、このことが、自分に対しての道徳教育となる』ということで、このことだったのか、道徳教育っていうのは……と思いました。道徳教育とは、○○という定義づけなど必要ではありません。道徳教育というもののりんかくが、およそ見えてきたように思います」

ある受講生の方から、試験答案に、受講の感想を書ききれなかったということで、手紙を頂いた。

「私は、4時間目の道徳教育の研究の講義を受けた者ですが、先生の講義によって、本当に深く自分のこと、他人のこと、生き方について考えさせられ、一言、お礼申し上げたくペンを取りました。

今までの私については、試験答案に書いた通りですが、あせりや不安ばかりで、ちっとも自分のことを見ていなかったのです。事例で取り上げて下さったSさんは、結婚後の考え方、生き方があまりにも、私と似ていて、驚きました。

私がこの通信教育を受けるようになったのも、そういうあせりの気持ちがあったことは否定できません。(もちろん、学びたいという純粋な気持ちもあるの

ですが……)そしてその上に、さまざまな地域活動をして、どうもうまく他人とやっていけないことからの逃げもあったように思います。いっしょに、活動している人から『あなたは、自分の学歴を鼻にかけて、他人をばかにしている』という意味のことを言われ、ショックでした。知らず知らずのうちに、そのようなふるまいをしたのかもしれませんが。今までの私でしたら、『そんなことを言う人は、私をわかってくれない人だから、つきあわなければよい』と考えたでしょう。しかし、私は、このごろ、自分が人とうまくやっていけないことは、自分に原因があるのではないかと思い始め、なんとか、解決したいと思っておりました。

先生の講義を受けて、何とか道が見えてきたように思います。自分が他人より優れていたい、という気持ちがどうしても抜けきれない……これは幼少時からの経験や他人からの評価からきていて、抜け出すのは、大変です。幸い、私は大学に入ってから、様々な危機に直面し、今までの自分ではダメだということに気付いてきました。先生のお話から、他人を受け入れることが、いかに大切かということに気付き、自分の生き方は、他の人や社会にとられることなく、自分だけの尊いものなのだという風にも考えられました。……」

紙数がつきたので、これ以上、引用を続けるのは、ここでやめておきたい。受講生の方々が書いて下さった感想についての解釈は別の機会にゆずりたい。

【参考文献】

Yasumaro Watanabe, "Selbstwertanalyse und christlicher Glaube",
Evangelische Theologie, Januar/Februar 1980, Chr. Kaiser Verlag, München.

○拙論「Kの自己評価分析——ほんとうの自己を求めて——」「まみず」1975年7月号より1976年10月号まで連載、柏樹社。

○拙論「Hさんの自己評価分析——不安からの解放」,「まみず」1977年1月号～3月号柏樹社、その後のH君についての研究。

○拙論「Sさんの自己評価分析——ある女性の不安からの解放の歩み」,「まみず」1980年1月号から現在連載中。

なお, H君のカウンセリングの実さいについては,「不安からの解放——あるカウンセラーの手記——」「チャペル・ニュース」1977年1月号～3月号, 立教大学。参照のこと——。